合コン殺人事件

口封じ

春日信彦

日本州

日本州が、連邦政府に正式に承認されたことにより、日本州の政治、経済、法律は、一気にアメリカ合衆国の州として刷新された。日本国憲法は、州憲法となり、日本州法が新たに制定され、施行された。経済において、すべての関税が撤廃され、本国からの低廉な農産物、畜産物が日本州の市場に出回り、日本州の農業、畜産業は、壊滅した。また、低賃金で働く移民の増加で、日本人労働者も移民の賃金水準に引き下げられた。

最も、日本州の産業形態を変えたものは、移民人口の急激な増加であった。アメリカ本国からはもちろん、アジアからは、インド、タイ、フィリピン、マレーシア、インドネシア、中国、韓国、南米からは、ブラジル、コロンビア、アルゼンチン、チリ、ヨーロッパからは、ドイツ、イタリア、ポーランド、ギリシャ、フランス、ロシア、など世界各国から多くの移民が日本州に流れ込んできた。日本州の人口に占める移民の割合は、約２０パーセントにも及んだ。

移民の増加による就職難の煽りからか、多くの男性の若者たちは軍隊に入隊したが、それでも、低賃金で働く契約社員、アルバイター、パートタイマー、その日暮らしの日雇い労働者、路上や公園で生活するホームレスの増加は、日に日に増加した。貧困層の若者は、必長時間労働に耐え、必死に働いたが、貧困から抜け出すことは不可能に近かった。国際組織のセックスビジネスマフィアは、就職難に苦しむ多くの少女たちをターゲットに、マスメディアを利用し、芸能界に安易に参入させ、表面に現れない性犯罪の温床を作り出していた。

北海道地区では、ロッキード社、ボーイング社の巨大な兵器工場が建設され、農業、畜産業地区から軍事工業地区と変貌した。東北地区では軍事基地の建設が行われ、軍人、移民、貧困層を受け入れる居住地区として、インフラ整備が推進された。アジア最大の軍事基地となった東北地区に居住する軍人の数が１００万人を超え、日本州の予算において、軍事費が２０パーセント強にまで膨れ上がった。軍事費縮小を図るため、移民の軍隊受け入れの制限が為されたが、貧困層の人口増加に歯止めが利かず、軍隊志願者は、毎年増加した。

一方、九州地区では、関東地区、関西地区の富裕層たちの移住が顕著になり、また、アメリカ本国の富裕層たちも居住するようになった。さらに、多国籍企業の日本州本社も九州地区に置かれ、合衆国においてニューヨーク、ロサンゼルスと並ぶ情報発信文化地区となった。教育制度は、本国と同じ高校までが義務教育となったが、富裕層は高額な授業料を支払い、九州地区に設立された私立学校を利用し、貧困層は、低廉な授業料の州立学校を利用するようになった。

産業勢力関係では、自動車産業において、燃費のいい日本州の車が、アメリカ本国市場を席巻し、消費者の需要に答えられない本国の自動車企業は、日本州企業に買収された。一方、電力業、金融業、保険業、運輸業、通信業、医療業などにおいては、アメリカ本国の多国籍企業が日本州の企業を買収した。また、公的年金、国民健康保険、社会保険は、民間の保険会社に移行され、国民皆保険は崩壊し、国民の約５割は無保険となった。

日本人の多くは、移民との文化の違い、道徳の違い、宗教の違い、言語の違い、などから一般生活においてトラブルが増大すると予想していた。ところが、移民たちの意外な一面に驚くこととなった。それは、移民たちの日本語への取り組みだった。日本人たちは、外国人とのコミュニケーションのために英語、中国語、ハングル語、フランス語、ドイツ語、などを学ぶ若者が急増したが、移民たちは、英語を習得すること以上に、日本語を熱心に学習した。全国各地に日本語学校が設立され、多くの移民が日本語を学ぶようになった。

当然、予想はされていたが、諸外国の移民たちから持ち込まれた多様な結婚文化は、やはり、日本人だけでなく、移民たちにも大きな動揺をもたらした。まず、恋愛観や結婚制度が、出身地によって大きく異なっていた。特に、イスラム圏の移民たちの結婚制度は、先進国の自由恋愛による結婚とはまったく異なった。そのため、イスラム人向けの恋愛相談所、結婚相談所、などが設けられるまでになった。

人口の約５パーセントに当たる富裕層の結婚観においては、富裕層同士の恋愛、結婚を望み、富裕層向けのネット結婚相談システムの利用だけでなく、年収、家柄、社会的地位、などのハイレベルな条件をクリアした人たちからなる会員制の結婚仲介所を利用するようになった。彼らは、資産拡大を目的とする政略結婚を盛んに行い、富裕層の権力拡大を図った。

一方、貧困層の結婚観においては、多くの女子たちは、結婚後、少しでも安定した子育てができるようにと、低賃金でも安定した職を持った男性を探すようになった。貧困層の女子たちは、結婚相談所の利用より、合コンを通して結婚するようになっていた。中でも、二泊三日のホテル、旅館における合コンが、最も人気があった。貧困層の女子が、富裕層の男子と結婚することは、不可能に近いため、二泊三日の合コンで目にかなった男性を見つけ、自分からコクり、夜這いをかけて、ライバルを突き落とし、男性をゲットする結婚が一般的になった。もはや、結婚は、男性争奪戦、と化していた。

合コン殺人

今年に入り、ますます合コンイベント人気は急上昇し、ホテル、旅館は合コン客で賑わっていた。各宗教団体も合コンイベントを行い、信者の獲得に力を入れていた。バッテン真理教の勢いは目を見張るものがあり、富裕層から貧困層まで幅広く合コンイベントを行い、各地の教会でイベントを繰り広げていた。７月４日、バッテン真理教中洲教会の合コンイベントで歴史に残るような摩訶不思議な殺人事件が起きた。

その事件とは、バッテン真理教中洲教会での合コンイベントで、参加者の女性Ｓが何ものかに殺害された。バッテン真理教会で起きた殺人事件と言うことで、ニュースでは大きく取り上げられず、水面下で捜査がなされた。犯人は、合コンに参加した５人の男性のうちの一人と推測されたが、いまだ、ホシが上がらず、謎の殺人事件として捜査が行われていた。

毎月２回行われている恒例の合コンイベントは、男性５人、女性５人によるもので、教会で二泊三日のフリーデートを行うものだった。毎回、一組は、カップルが誕生し、成婚にいたっていた。女性たちにとっては、最高の婚活イベントとなっていた。合コンが行われた中洲教会には、宿泊できるワンルームの部屋が２階に６部屋、３階に６部屋あり、ほとんどの場合、２階に女性が宿泊し、３階に男性が宿泊していた。

イベントホールは１階にあり、そこで、午前１１時から午後１時までパーティーが開催され、パーティー終了後は、フリーのデートを行うものだった。お互い気に入った男女は、三日間、日帰りできる気に入ったスポットで自由にデートができ、そのデートで女性が夜這いの時間を申し出て、男性が承諾すると、その夜、女性が男性の部屋に夜這いに行くことになっていた。そして、夜這いが成立すれば、二人そろって、恋愛成立を教会に申し出ることになっていた。

イベント初日の３日、県警勤務の男性Ｍは、午後１０時少し前に夜這いに訪れた女性Ｈと一夜を過ごした。４日の翌朝５時に、女性Ｈは、自分の部屋に戻り、親友の女性Ｓを朝食に誘うため、７時少し過ぎたころに女性Ｓの部屋のドアをノックした。しかし、数回のノックにもかかわらず、女性Ｓの返事がなかったためノブを回した。ドアは、ロックされておらず、ドアは何の抵抗もなく開いた。女性Ｈが中に入ると女性Ｓは，ベッドに横たわっていた。女性Ｈは、女性Ｓを起こすべく身体をゆすったが、返事はなく、息がないことに気付き、悲鳴を上げて、部屋から飛び出した。検視の結果、女性Ｓの死亡推定時刻は、４日の午前１時前後と推定された。

女性Ｓの死因は、首に見られる手の痕跡から、扼殺と判断された。手の痕跡の大きさから判断して、男性ではないかと推測されたが、確証はなかった。参加した５人の男性すべて、事情聴取を行った結果、誰一人疑わしい人物は浮かび上がらなかった。女性Ｓの部屋にも男性の指紋は一つもなかった。首に残された手の痕跡の大きさからして、女性は除外されると判断されたが、念のため４人の女性も事情聴取がなされ、手のサイズが確認されたが、疑わしき人物は、一人もいなかった。ただ、女性Ｈの指紋がノブにあったが、これは、部屋へ出入りしたときについたものと判断され、殺人犯の手がかりとはなり得なかった。

外部からの侵入者による殺害が考えられたが、一階詰め所には、男性(５８歳)の警備員が常駐しており、また、２階と３階の窓からの侵入が考えられたが、すべての窓は、ロックされており、ガラスを割って侵入した形跡はなかった。したがって、外部からの侵入者による殺害の可能性は否定された。そのことから、９人の参加者と一人の警備員の誰かが殺害したと考えられたが、誰一人、疑わしき人物は浮かび上がらなかった。ついに、事件に行き詰った県警は、伊達刑事に極秘の捜査を依頼した。

伊達刑事は、１０人の調書を何度も読み返し、殺人現場である中洲教会にも数度足を運んだが、まったく、犯人像が浮かび上がらなかった。沢富刑事を事件に協力させたくなかったが、行き詰ってしまった伊達刑事は、しぶしぶ、沢富刑事に相談することにした。伊達刑事が唯一怪しいと直感した人物は、男性ではなく、女性Ｈだった。その理由は、二人は、小学校時代からの親友ということだけだったが、５人の男性と女性Ｈ以外の女性３人には、女性Ｓとの接点がなく、殺人動機もまったくなかったからだ。当然、警備員も同様だった。

首の痕跡

身近なものほどお互いを知り尽くしていて、突然、殺人動機が生まれることを、伊達刑事は長年の経験から知っていた。沢富刑事に自分の直感を話し、沢富刑事の意見を聞こうと、いつもの中洲新橋近くの屋台に飲みに行った。伊達刑事は、グラスの焼酎をグイッと喉に流し込み、事件の概要を話し始めた。「屋台はいいよな～、気分が落ち着く。ところで、事件のことで、ちょっと、意見を聞きたいと思ってな」改まった口ぶりに沢富刑事は、右横の伊達刑事に顔を向けた。

「例の未解決の事件ですか？」伊達刑事は、さすが察しがいいと思い、大きく頷いた。「そうだ、例のやつだ。調書を読んでも、まったく犯人像が浮かばん。俺には、手に負えん。どう思う？」突然、振られた沢富刑事は、キョトンとした表情で答えた。「僕に言われても分かりませんよ。伊達さんは、どう思われるんですか？」伊達刑事は、頷き、もう一口焼酎を流し込み、小さな声で話し始めた。「いやな、とにかく、誰一人、殺人動機がないんだ。ホシは、男性と推測されるんだが、俺は、親友の女性Ｈがクサイと思う」

沢富刑事は、意外な犯人像を聞いて、一度持ち上げたグラスをテーブルに置いた。「それは、どうしてですか？」伊達刑事は、内緒話するようにさらに小さな声で話し始めた。「直感だ。彼女は、ガイシャの親友だ。しかも、第一発見者ときてる。間違いない」沢富刑事は、伊達刑事の直感は、信頼できるとは思っているが、いまひとつ根拠が薄いと思った。「そうですか。確かに、動機は、不明ですが、もし、考えられるとすれば、やはり、親友でしょう。お互いを知り尽くしていればいるほど、お互いの秘密を知っていることになります。確かに、Ｈはクサイですね」

同感してくれたことに笑顔を作った伊達刑事は、残りの焼酎を飲み干し、グラスをオヤジに差し出した。「オヤジ」店主は、即座にグラスを受け取り、焼酎を注いだ。「今日は、ご機嫌じゃないですか。何かいいことでもあったんですか？」オヤジは、笑顔でグラスを伊達刑事に手渡し、さらに、声を張り上げた。「どうスカ、馬刺し」伊達刑事は、高級な馬刺しには、手が出なかったが、上機嫌になったついでに、食べることにした。「そいじゃ、もらうか」オヤジは、小さな冷蔵庫から取り出した馬肉の塊をスライスすると、丁寧に小皿に並べ、笑顔で伊達刑事の前に差し出した。

「おい、食べろ。さあ」沢富刑事は、引きつった笑顔で馬刺しを一切れつまんだ。沢富刑事は、オヤジに聞こえないように耳打ちした。「たった、３切れで１０００円は、ボッタクリじゃないスカ。オヤジ、商売上手ですね」伊達刑事は、頷いたが、笑顔でしゃべった。「まあ、今日は、俺のおごりだ、さあ、食え、食え」伊達刑事は、左手で沢富刑事の右肩をポンと叩いた。伊達刑事は、まさか、今の話を聞かれたのではないかと、顔を引きつらせ、苦笑いしながらオヤジの横顔をちらっと覗いた。オヤジの表情を見て安心した伊達刑事は、話し始めた。

「お前も、そう思うか。しかし、問題は３つある。一つは、首の痕跡の大きさがＨの手よりはるかに大きいこと。二つ目は、ＨにはＭと寝ていたと言うアリバイがあること。三つ目は、Ｈには、殺害の動機が見当たらないこと。どう考えても、分からん」伊達刑事も馬刺しを一切れつまみあげた。「え、アリバイ？」沢富刑事は、とっさに振り向いた。「そうですよ、アリバイがはっきりしているのは、Ｈだけです。そこです。アリバイ工作ですよ、間違いない」伊達刑事は、目をぱちくりさせ、手を震わせていた。「どういうことだ。おい」伊達刑事は、沢富刑事の右肩を掴んだ。「オヤジ、勘定」沢富刑事をせきたてると、勘定を済ませ立ち上がった。

伊達刑事は、国体道路に出るとタクシーを拾い、沢富刑事を押し込んだ。「おい、どういうことだ。さっきのアリバイだ」沢富刑事は、一体何が起きたのかとキョトンとしていたが、アリバイのことで疑問に思ったことを話し始めた。「思うんですが、他の女性３人は、特にアリバイがなくて、Ｈだけがあるわけです。つまり、最も疑われないように、アリバイを作ったのではないかと思うんです。と言うことは、あえて、アリバイを作った人物が最も怪しいと言うことじゃないですか」

　伊達刑事は、沢富刑事の話に耳を傾けながら、何度もうなずいた。「でもな～、首の痕跡は、男のものだし」伊達刑事は、ドライバーの後姿を見つめた。ドライバーは女性であった。「大濠公園の入り口まで、頼む」伊達刑事が行き先を告げると、明るく、かわいい声の返事が返ってきた。「ハイ」ドライバーは、ルームミラー越しに笑顔を見せた。ドライバーの声を聞いた沢富刑事は、上体を起こし、ドライバーに声をかけた。「もしかして、口森さん」即座に明るい声が返ってきた。「ハイ」ドライバーは、ルームミラーを見つめ、笑顔で挨拶した。

　伊達刑事は、右横を振り向き、声をかけた。「おい、知り合いか？」沢富刑事は、右頬をかきながら答えた。「まあ、ちょっと」伊達刑事は、右ひじで沢富刑事の左腕をちょこんとつつくと、大きな声で話し始めた。「え～～、おい、水臭いじゃないか。いるならい，いるって言えよ。このやろ～」沢富刑事は、誤解されたと思い、即座に返事した。「違いますって、ちょっとした、お友達です。そうですよね、口森さん」沢富刑事が、同意を求めると、意外な返事が返ってきた。「恋人未満って、とこですよね、沢ちゃん」ドライバーは、ルームミラーにウインクした。

「やっぱ、そうじゃないか。こいつ。僕は、こいつの上司で、伊達といいます。よろしく」ドライバーは、ルームミラーを見つめ、返事した。「こちらこそ。何かあったら、いつでも呼んで下さい。飛んでまいります」赤信号を見たドライバーは、ブレーキをゆっくり踏んだ。沢富刑事は、バツが悪くなり、どのように話を持っていけばいいか戸惑ってしまった。「こいつ、彼女募集中って、言ってたんですよ。こんなにかわいい方が、いるとは」伊達刑事は、ドライバーの後姿に返事した。

「あら、刑事さんって、お上手なんですね」伊達刑事は、自分たちが刑事であることを知っていることにハッとしたが、沢富刑事の彼女であれば当然のことだと頷いた。「いや、こいつ、刑事のわりには、刑事らしくないんですよ。いつも、ボケ～として、のんきなやつなんです。出世欲がなくて、結婚する気もないです。困ったものです」伊達刑事は、沢富刑事を横目にぼやいた。ドライバーは、ルームミラーをちらっと見つめ、即座に返事した。「あら、いいじゃないですか、ボケ～っとしてて。沢ちゃんは、とっても、優しい方ですわ。私、そういう沢ちゃん、大好きなんです」

沢富刑事は、彼女の話を聞いていると、かなり付き合っているように聞こえて、ドギマギし始めた。「そうですか。こいつには、こいつのよさがあります。よかったな～、おい」伊達刑事は、沢富刑事の顔を覗き込んだ。「は～～、まあ、もう～、そろそろじゃないですか？」すでに、荒戸を過ぎていた。「ハイ、もうすぐです」ドライバーは、明るい声を響かせた。伊達刑事は、即座に告げた。「チャイナガーデンのところでいいです」ドライバーは、頷き、チャイナガーデンの少し手前で車を止めた。

二人は、しばらく南に向かって歩くと、１５階建てのマンションの前にたどり着いた。「え、マンション買ったんですか？」沢富刑事は、伊達刑事がマンションを買ったことを知らず、てっきり、行きつけの焼き鳥屋にでも連れて行かれるものと思っていた。「ア、そうだな。まだ、言ってなかったか。先月、買ったばかりだ。まあ～、カミさんに買ってもらったんだがな」伊達刑事は、頭をかきながらつぶやいた。「へ～～、奥さんのヘソクリって、すごいんですね」沢富刑事は、冗談を言った。

「そう、冷やかすなよ。分かるだろ。カミさんのオヤジさんからのプレゼントだ。俺は、稼ぎが少ないから、同情されたってわけだ」沢富刑事は、さっしがついていたが、皮肉っぽかったので、ちょっと気まずくなり、苦笑いした。伊達刑事は、彼女のことを話したくて、マンションの５０５のドアを開くと、大きな声で細君を呼んだ。「お～い、帰ったぞ。ビッグニュースだ。驚くな」飛んでやって来た妻、ナオ子は、目をパチクリさせて、尋ねた。「あら、沢富さん。いらっしゃい。そんな、大きな声で。宝くじでも当たったの？」

キッチンの椅子に腰掛けるとマジになって答えた。「おどろくな。重大発表がある。なんと、なんと、沢富刑事に、彼女ができました～」それを聞いたナオ子は、ジャンプして驚き、部屋中に響き渡る拍手をした。「おめでとう、沢富さん。どんな方？何をなされている方？どこのお嬢様？福岡の方？」ナオ子は、沢富刑事の顔をのぞき見て、返事をせきたてた。伊達刑事は、ドヤ顔で、ナオ子を制した。「おい、そう、あせるな。俺が話してやる。ビール。さあ」伊達刑事は、天下を取ったように、ナオ子に命令した。

ナオ子は、一刻も早く、話を聞きたくて、フレッジに一目散に駆けて行った。「ハイ、どうぞ。さあ、話してちょうだい。さあ、早く」ナオ子は、夫の肩を激しくゆすった。「待て、待て、まずは、一杯。借りてきたネコみたいじゃないか、おい」伊達刑事は、沢富刑事にグラスを差し出し、ビールを注いだ。ナオ子は、沢富刑事の斜め前に腰掛け、じっと沢富刑事を見つめた。沢富刑事は、ビールを一口含み、喉にゆっくり流し込むと、小さな声で話し始めた。「早合点しないでください。彼女は、単なる友達です。恋人じゃありません」沢富刑事は、俯いてしまった。

　伊達刑事は、大きく頷き、ドヤ顔で話し始めた。「まあ、彼女には変わりない。そう、隠さなくていいじゃないか。悪いことをしてるわけじゃなし。どうどうと、付き合えばいい。なあ、ナオ子」ナオ子は、頷き、声をかけた。「そうですとも。その方って、どんな方？どこのご令嬢なの。一度会いたいわ。あなたは、お会いになったの？」伊達刑事は、胸を張って、答えた。「もちろんさ。今しがたまで、話をしていたんだ。とっても、明るくて、かわいい方だ。沢富には、もったいないくらいだ」

　ナオ子は、是非会いたくて、うずうずし始めていた。「あら、どこでお会いになってたの。とにかく、仲人は、私たちに任せてくださいよ。約束でしょ」ナオ子は、沢富刑事の顔を覗きこみ同意を求めた。ナオ子は、仲人をすれば、主人の出世は間違いない、と心のそこで、つぶやいた。「奥さん、ちょっと待ってください。もし、結婚するようなことがあれば、お願いします。でも、本当に、お友達なんです。恋人じゃありません」沢富刑事は、話がとんでもないところに向かい、どのように説明していいか、わからなくなった。

伊達刑事は、腕を組み、仲人をしている姿を思い浮かべていた。「ナオ子、そう、せかしちゃいかん。結婚には、順序ってものがある。相手の御両親にもお会いして、まずは、結納じゃないか」大きく頷いたナオ子は、そっと沢富刑事の顔色を窺って、ビールを注いだ。沢富刑事は、これ以上話をこじらせては、返って誤解を招くと思い、了解したふりをして、話を変えることにした。「そのときは、よろしくお願いします」沢富刑事は、小さく頭を下げた。話を変えようとした瞬間、ナオ子の声が飛び出した。

笑顔を作ったナオ子は、即座に、質問した。「何をなされている方？そのくらいは、いいでしょ」ナオ子は、夫の顔をちらっと見つめた。伊達刑事は、沢富刑事の顔を見つめ、一つ頷き返事した。「タクシー、の運転手をなされている」ナオ子は、一瞬、固まった。タクシーの運転手、ナオ子は心でつぶやいた。そして、小さな声で、問いかけた。「タクシーの運転手、って、あの、運転手さん」ナオ子は、てっきり、代議士か、財閥のご令嬢と思っていた。伊達刑事が、低い声で答えた。

「そうさ、そこらを走っている、タクシーの運転手さ。何タクシーだっけ、あ、そう、ＹＥＳタクシー。今しがた、彼女に乗せてもらって、帰ってきたんだ」ナオ子は、開いた口がふさがらなかった。「は～～、そうですか。私も、一度、お会いしたいわ」ナオ子は、そっと、沢富刑事の顔を覗き込んだ。「はあ、機会があれば」沢富刑事は、もう、これ以上彼女の話を続けたくなかった。「ワシに任せておけ。こういうことは、あせっちゃいかん。なあ」沢富刑事をちらっと見て、グラスのビールをグイッと飲み干した。

とっさに、沢富刑事は、事件の話を口にした。「アリバイ、のことですが。やはり、Ｈがクサイですよ。アリバイですが、夜中の１時ごろ、本当に男性Ｍと一緒にいたんでしょうか？」伊達刑事は、自分の考えを述べた。「調書によると、Ｈは、３日の１０時ごろに男性Ｍの部屋を訪れ、翌朝の５時ごろに自分の部屋に戻った、となっている。だから、夜中の１時ごろは、男性Ｍと一緒と言うことになるんじゃないか」

　沢富刑事は、腕組みをして、話し始めた。「そこなんですが、夜中の１時に一緒にいたと言う証拠はありますか？男性Ｍが一緒にいたと言っているんですか？」伊達刑事は、調書を思い出しながら、答えた。「いや、男性Ｍが、そう言っているとは書いてなかったような。それは、Ｈの話だ。そうか、１時ごろ、Ｈが部屋を抜け出したと言うんだな。そして、Ｓのクビを。そういうことか」沢富刑事は、目を輝かせて、左掌に右手の拳骨をバシッと打ちつけた。「そうですよ、きっとそうです。夜中の１時ころだと、男性Ｍは、眠っていたはずです。そのすきに、抜け出し、Ｓをやったに違いない」

　ナオ子は、運んできたお茶を二人の目の前に差し出した。ナオ子は、神妙な顔で口を挟んだ。「でも、犯人は、男性じゃ。ほら、首の痕跡が、男性って言ってたでしょ。男性たちって、どんな方たちなんですか？」伊達刑事は、頭をかきむしり、大きな声で話し始めた。「そこなんだ。男性たちは、みんな警察官だ。警察官だからと言って、殺人をしないってことはない」沢富刑事は、もう一度確認した。「痕跡が大きかったんですね。Ｈの手よりはるかに大きかったのですね」伊達刑事は、頷いた。「そうだ。それに、女性の力で、簡単に、絞め殺せるものだろうか？やはり、男性なのか？分からん。一体どういうことだ」

沢富刑事もナオ子も黙って顔を見合わせていた。「こういうことは考えられない。男性Mが、絞め殺したとして、女性Hに口裏を合わせるように命令したってことは」伊達刑事は、顔を振った。「いや、それはない。男性Mと女性Sは、まったく接点がないんだ。つまり、殺す動機がないってことだ」ナオ子は、頷いたが、思いついたように話し始めた。「女性Hに依頼されて、殺したってことは？」伊達刑事は、また、大きく顔を振った。「それもないだろう。警察官たるものが、依頼されたからと言って、殺人は犯すまい」

沢富刑事も、同感だった。「私は、やはり、Hがクサイと思います。男性たちには、誰一人、Sと接点がないのです。また、殺す動機もないです。思うに、手の痕跡は、何らかの細工ではないでしょうか？」伊達刑事もそのことには気付いていたが、どうやって、大きな痕跡をつけたか考えていた。そのとき、ナオ子が、ポンと手を叩いた。「あなた、これ見て」ナオ子は、キッチンにかけていき、鍋を掴むときに使う大きなキッチン手袋を持って戻ってきた。「どう、これ」伊達刑事は、手袋を手に取り、頷いき、天井を見つめた。

突然、沢富刑事が大きな声を張り上げた。「そうです、手袋です。こんな手袋じゃなく、ほら、あれです。軍手です。軍手を重ねれば、手は大きくなるじゃないですか。奥さん、さすがですね。きっと、そうです」伊達刑事も、笑顔で飛び上がった。「やっと、なぞが解けたぞ。ヤッパ、あの女だったか。クソ、だましやがって。きっと、しょっ引いてやる」沢富刑事は、笑顔を見せなかった。「待ってください。早合点しては、勇み足になります。確証を掴むまでは、なんともいえません」

ナオ子も頷いた。「そうですよ。あくまでも、単なる憶測じゃないですか。何の確証もないんです。それに、どんな殺人動機があるって言うんです」伊達刑事は、腰を落とすと、ぼんやり手袋を見つめた。「そうだよな。あくまでも、憶測に過ぎない。物的証拠は、何もない。アリバイもあるし。何か他に手がかりはないのか？」三人は、お通夜のように黙りこくっていたが、沢富刑事が、静かに話し始めた。

「今のところ、何の手がかりもありません。やれることといえば、Ｈの過去を洗い出し、何か、殺人の動機となるものを探し出す以外ないように思います。もしかすると、ＨはＳに何か弱みを握られていて、恐喝されていたんじゃないでしょうか？」伊達刑事も、頷いたが、過去を洗い出すとなれば、厄介なことになると思えた。「でもな～～、彼女は、課長の・・」伊達刑事は、またもや頭をかきむしり、天井を見つめた。

ナオ子は、即座に訊ねた。「課長のって、どういうこと？」伊達刑事は、腹を割って、話すことにした。「おい、誰にも言うんじゃないぞ。Ｈは、県警本部課長のご息女だ」ナオ子は、小さく頷いた。「そうだったのですか。それは、厄介ですね。ヘマをすれば、一生、ヒラってこと」伊達刑事は、ゆっくり頷いた。「ここだけの話だが、どうも、この事件は、迷宮入りしそうだ。ちょっと、この前、課長に呼ばれたんだが、誰かが、内側から窓を開け、手引きしたと言うことは考えられないか、と言われた。もし、そうだとしたら、雲を掴むような事件になる。こうなると、俺の手には、負えん」沢富刑事は、唖然とした顔でナオ子を見つめた。

沢富刑事は、ポンと手を叩いた。「探るのは、Ｈではなく、殺されたＳです。Ｓの過去が分かれば、きっとＨの過去も分かるってものです。二人は、大の親友じゃないですか。とにかく、殺されたＳの過去を徹底的に調べましょう」目を輝かせた伊達刑事は、ドヤ顔で頷いた。「よし、でも、それがだな～。Ｓの父親って言うのが、市会議員ときてる。これまた、厄介だ。Ｓは、父親の仲介で、天神のＭデパートで働いていた。そう、Ｈも一緒だ。Ｓは、化粧品売り場、Ｈは、婦人服売り場だ。二人とも、職場での評判は、良好だし、これと言って、変なうわさはなかった。とにかく、Ｓの過去を調べてみるか」伊達刑事は、まず、学生時代についての聞き込みをすることにした。

女の直感

Ｓの調査は、伊達刑事に任せて、沢富刑事は、自分独自の違った角度で調査することにした。翌朝、沢富刑事は、ひろ子にメールした。しばらくすると、１０時ごろ、いつものところ、との返信があった。沢富刑事は、さっそく、中洲川端駅近くの吉野家で朝食を済ませ、冷泉公園に向かった。いつものベンチでぼんやりしていると、公園の北東に走る道路にＹＥＳタクシーが止まった。しばらくすると、車の前方に立ったひろ子が大きく手を振り、合図した。沢富刑事は、いつものように、笑顔を作り駆けて行った。

沢富刑事は、車に乗り込むと、行き先を告げた。「福岡タワーまで」即座に了解したひろ子は、アクセルをグイッと踏み込んだ。ひろ子はしばらく黙っていたが、口がうずうずし始め、甲高い声で話し始めた。「今度は、どんな事件なの？」沢富刑事は、今回ばかりは、ひろ子が頼みの綱だった。「ちょっと、今回は、是非、ひろ子さんの意見を聞きたいんだ。まあ、なんと言うか、女の直感、と言うやつを」ひろ子は、意見を求められたことに、心が弾んだ。「女の直感ですか。一体、どんな事件なの？」

沢富刑事は、大きく深呼吸し、ゆっくり話し始めた。「運転は大丈夫だろうな。まあ、適当に聞いてくれ。君も知っている事件さ。例の教会での事件さ。県警では、犯人は、男性じゃないかと推測している。でも、彼らには、まったく、殺人動機がないんだ。もちろん、女性たちもない。物的証拠は、まったくないんだが、俺は、親友のＨがクサイと思っている。でも、まったく、手がかりがない。Ｈには、アリバイもある。だが、どう考えても、Ｈしか考えられないんだ。第一発見者と言うところが、なぜか、ひっかかる。ひろ子さんは、どう思う？」ひろ子は、笑顔で聞き流していた。

「そうね、沢ちゃんの直感もまんざらじゃないと思うけど、でも、何の証拠もないんだし、憶測だけじゃ、どうにもならないでしょ」沢富刑事は、予想していた返事に肩を落とした。「そうだよな。何の証拠もないのに、逮捕令状を取ることはできない。しかも、彼女は、警官の娘ときている、一体、どうすればいいんだ」沢富刑事は、頭をかきむしりながら、激しく顔を左右に振った。ケイカン、とひろ子の耳に響いた瞬間、子宮にビリッと電気が走った。その瞬間、女神の声が脳裏に流れた。

「Ｈが第一発見者と言ったけど、発見したときって、Ｓの部屋のドアに鍵はかかってなかったの？」沢富刑事は、その質問にハッとした。「そうだ。ドアは、開いていたそうだ。それって、なんだかおかしいよな。男性ならともかく、女性は、鍵をかけるよな」ひろ子は、答えた。「鍵をかけずに寝る女性はいないわよ。おそらく、誰かに、鍵をかけないように言われたってことよ」沢富刑事は、即座に質問した。「誰だよ、いったい」ひろ子は、ハハハと笑い声を上げた。「だから、誰かよ」ひろ子は、沢富刑事のしかめっ面をルームミラー越しにのぞき見た。

ルームミラー越しに見ていたひろ子は、目を輝かせ澄んだ声で話しかけた。「沢ちゃん、女の直感だけど」突然、沢富刑事は、ルームミラーを覗きこんだ。「え、直感って。いったいどんな。聞かせてくれ、早く」沢富刑事は、頭を運転席に突き出した。ひろ子は、ハハハと笑い声を上げると、マックのパーキングに車を突っ込んだ。「そんなに興奮して、沢ちゃんたら。喉、渇いたわ」ひろ子が話し終えないうちに、沢富刑事は、車を飛び出し、オレンジジュースを買うと、飛んで引き返してきた。

「さあ、どうぞ。直感って？」オレンジジュースを一口喉に流し込み、ひろ子は、笑顔をルームミラーに向けた。「もう～、沢ちゃんたら、どうしてそんなにせっかちなの」ひろ子は、恥ずかしそうな表情を見せた。「ここじゃ、いや。あそこで話すわ」ひろ子は、エンジンをかけると、しばらく西に向かって走り続けた。沢富刑事は、がっかりして、目をつぶり、気分を落ち着けるために、今朝、ちらっと見た２１手詰めを考え始めた。

沢富刑事の耳に甲高い声が飛び込んできた。「ついたわよ。沢ちゃん」沢富刑事が、目を開けると、ラブホのパーキングと思われた。「え、ここって、ラブホ。どういうこと？」ひろ子は、車を降りると、手招きした。「行くわよ。早く」沢富刑事は、なにがなんだか分からなかったが、ひろ子の後を駆けて行った。ひろ子が、部屋のドアを開けると、大きく背伸びした。「ちょっと疲れたの。少し休みましょうよ」中央にある丸テーブルの椅子に腰掛け、沢富刑事のキョトンとした表情を見て、クスッと声を出した。

沢富刑事は、とにかく、直感を聞きだしたくって、椅子に腰掛け、訊ねた。「ところで、直感って、一体、何だよ。早く教えてくれ。頼む」沢富刑事は、両手を合わせ、頭を下げた。ひろ子は、うなじに手を当て、つぶやいた。「汗かいちゃった。シャワー、浴びてくるわ。次に、沢ちゃん」ひろ子は、すっと立ち上がり、シャワールームにかけて行った。１０分ほどすると、ひろ子は、バスタオルを巻いて飛び出してきた。沢富刑事にちらっと目をやり、笑顔で一直線にウォーターベッドにかけていき、ジャンプして飛び乗った。「いいわよ、沢ちゃん。ゆっくり、汗流して」催眠術にかけられたように沢富刑事も、言われたとおりに、汗を流すことにした。

　沢富刑事が出てくると、ひろ子は、ベッドから手招きした。沢富刑事が、ベッドまでやってくると、ひろ子は、目を閉じた。沢富刑事は、覚悟を決めて、ベッドにもぐりこんだ。ひろ子は、男をゲットできた喜びにしびれていた。沢富刑事は、今後もひろ子の助けが必要と思い、彼女にすることにした。しばらく、セックスしていなかった沢富刑事は、あっという間に射精してしまった。一瞬、まさか、と思ったが、もはや手遅れだった。しめしめと思ったひろ子は、ベッドから飛び起きると、シャワールームにかけて行った。沢富刑事も、すぐ後を追って、駆けて行った。シャワールームからは、ひろ子のキャ～キャ～と言う歓喜の声と勝利の笑い声が部屋中に流れ出していた。

　二人がテーブルに着くと、沢富刑事は、目を大きく見開き、ひろ子をグイッと睨みつけ、訊ねた。「もういいだろう。直感ってやつを、聞かせてくれ。俺の、彼女になったんだからな」ひろ子は、もったいぶった表情で、ヘヤーブラシで、黒髪をそっと梳いた。「あくまでも、直感よ。いい」沢富刑事は、待ちきれず、手が震えていた。「いいとも、さあ、早く」ひろ子は、一瞬、躊躇した表情を作り、つぶやいた。「彼女、Ｈだけど、もし、犯人だったら、沢ちゃんに、接近すると思う。間違いないわ。本当に、接近してきたら、Ｈは、本ボシ」

沢富刑事は、一瞬何のことやら分からなかったが、しばらくすると、ひろ子の言わんとすることが分かった。「そうか。そのときだな。分かった。ヤッパ、女の直感ってのは、すごいな。ありがとう」沢富刑事は、きっと、Ｈは、何らかの方法で接近してくると睨んだ。とにかく、じっと待つことにした。Ｈが接近してきたら、彼女の手に乗って、手がかりを掴むことにした。ひろ子は、さらに付け加えた。「きっと、沢ちゃんを陥落しに来るわ。そのときは、相手をしてあげるといいわ。虎穴に入らずんば、虎子を得ず、って言うじゃない」ひろ子は、彼女としての自信に満ち溢れていた。

Ｓの過去

二人は、例の中洲新橋近くの屋台で、ちょいと焼酎を引っ掛けると、伊達刑事のマンションに向かった。伊達刑事がドアを開くと、大きな声で叫んだ。「おい、ビール。それと、焼酎」沢富刑事を席に着かせると、伊達刑事は、上着を隣の椅子にポイと置いて、さっそく話し始めた。「おい、驚くな。Ｓはな、あの名門の小中高一貫校の出身だが、かなりのワルだ。こっそり、教頭が話してくれたんだが、中学生のころ、万引きで捕まったことがあるそうだ。それは、父親の力でもみ消したそうだが。高校のころは、男遊びも派手だったらしく、教師とのエンコウのうわさもあったらしい」

沢富刑事は、頷き、Ｈの素性もなんとなく想像できた。「そうでしたか。と言うことは、Ｈも万引き仲間と言うことですね。Ｈは、捕まらなかったんですかね」伊達刑事は、頭をかいて答えた。「いや、Ｈのことは聞き出せなかった。でも、万引き仲間であったことは、間違いなかろう」沢富刑事は、頷き、話を続けた。「高校を卒業してからは、どうです」伊達刑事は、ビールで喉を鳴らし、答えた。「卒業後は、二人は同じＮ短大に進学し、学内での問題はなかったようだが、欠席が多く、卒業が難しかったようだ。無事卒業できたのも、Ｓの父親の力だそうだ。

卒業後は、Ｓは、市会議員の秘書、Ｈは、テンチカのブティックに勤めている。Ｓは、３ヶ月で秘書を辞め、２ヵ月後に、Ｈと同じブティックに勤務している。二人が一緒に働くようになり、欠勤が多くなり、そのことでクビになっている。特に、男性関係でトラブルはなかったようだ。その後、Ｓの父親の仲介で、１年前から現在のＭデパートに勤めている。まあ、こんなところだ」伊達刑事は、グラスの焼酎を一口すすった。

「お話では、特に気になる点はないようですが、何か、二人には、表には現れない秘密があるんじゃないでしょうか。話がぼんやりしていますが、Ｓは、Ｈの何か、弱みを握っていたと思われます。そして、Ｈの結婚を邪魔していたんじゃないでしょうか？」伊達刑事も、大きく頷き、同意の返事をした。「Ｓは、かなりの悪女に違いない。きっと、弱みに付け込んで、恐喝していたのかもしれん。万引きの件だろうか？」

沢富刑事は、何か他にあるように思えた。「Ｈは、しゃべられると困るような、何か、弱みを握られていたんじゃないか、と思います。おそらく、Ｈは、合コンを利用してＳを殺害する計画を入念に立てていたと思います。あれは、計画犯罪です」沢富刑事は、Ｈが犯人であると、改めて確信した。腕組みをしていた伊達刑事は、天井を見上げ、つぶやいた。「でもな～、証拠がないんじゃ、手も足もでらん。どうしたものか」

ナオ子は、そっと、夫の横に腰掛け、話に割り込んだ。「あなた、彼女は、課長のご息女でしょ。この辺にしておきましょうよ。これ以上、頭を突っ込むと、一生を棒に振ることになりませんか？」沢富刑事もそのことが気になっていた。「そうですよ。この辺でいいじゃないですか。こんなややこしい事件は、もう、こりごりです。ねえ、奥さん」沢富刑事は、ナオ子の顔をちらっと覗き、小さく頷いた。

伊達刑事も、同じ考えであった。「そうだな。何の証拠もないんだ。いくら、憶測しても、逮捕はできん。もうよそう、そうだ、今日、課長から電話があって、来週の日曜日、遊びに来ないかってさ。沢富も一緒に。本部長も来るそうだ。どうだ？」沢富刑事は、ひろ子の言った言葉が、脳裏によみがえった。“もし、Ｈがホシなら、きっと接近してくる。”「え、私もですか？それは、ありがたい。喜んでご一緒させていただきます」

ナオ子は、大きな声を張り上げ、立ち上がった。「ほんと、よかったじゃない。今日は、お祝いしましょ。そう、お寿司を取りましょう。沢富さんも、今日はゆっくりなさって」ナオ子は、有頂天になってしまった。課長と本部長に気に入られたと言うことは、出世、間違いない、と心の底で叫んだ。「ハア、お言葉に甘えて」沢富刑事は、改めて、ひろ子が言っていたことを思い出した。“本当に、接近してきたら、Ｓは、本ボシ。”沢富刑事は、頷いき、心でつぶやいた。ついにきたな。とうとう、Ｈは、動き出してきたな。今に見ていろ、必ず尻尾を掴んでやる。